

「地域の目」

島根県島根大学附属義務教育学校 9年 森本 瑞可



私は、近所に高齢者が多く住んでいる田と畑に囲まれた祖父母の家で育った。中学生になって、両親と3人で私の通う学校に近い新居に引越しをした。今までは、すれ違ふと「おかえり、野菜あまったんだけどいるかしら？」と声をかけてくださり、ご近所さんとの交流は盛んであった。しかし、新居のご近所さんとは会釈のみといった、互いのことを知らない関係性であった。

私は、ご近所間での「地域の目」が防犯の第一歩に繋がると考えている。

住民同士の挨拶ができる地域では、犯罪が少ないと言われているのをご存じだろうか？

というのも、ご近所付き合いが円滑な地域では、その地域の住民かどうかがすぐに判断できるため、顔の認識や話しかけられるのを嫌がる犯罪者にとって足の踏み入れにくい環境になるというわけだ。しかし、現にご近所付き合いを苦手とする人は80%を超えている。

ご近所付き合いによって「防犯」できる犯罪。

例えば、「侵入窃盗」。全国で令和5年度だけでも17,469件もの被害が確認されている。たしかに、ドアや窓、施錠に工夫をしたら被害を防ぐことができるかもしれない。しかし、「地域の目」はどうだろうか。ご近所付き合いが活発な地域では、すれ違ふ人に声をかける事も少なからずあるだろう。そんな時、普段見かけない人が歩いていれば、不審に思うかもしれない。新しい住民かと思ひ挨拶をするかもしれない。

例えば、「誘拐」。年間約8万人もの人が行方不明者として警察に届出が出ていると言われている。大半の人は数日で見つかっているが、現在でも何年経っても見つからない子供は少なからずいる。また、誘拐による長年の監禁が行われていた事件もある。日本でも人身売買の事例は年々増加傾向にある。もし、自分がそんな目にあったらどうだろうか。初めて見る知らない人にいきなり誘拐されてひどい暴行を受け、二度と家族に会えないと思ったら背筋がゾッとする。もし、ご近所さんとの関わりが活発だったら。「地域の目」の中で過ごす子どもたちはどれだけ安心して遊べるか。

住民の地域への関心が低い地域は犯罪の被害にあいやすいとされている。犯罪者が最も嫌うのは人の目であり「地域の目」である。住民一人ひとりの目と声が最高の防犯になるのではないか。

私は今まで、防犯は自分たちが自分の身を守るために行うのだと思っていた。しかし、作文を通して「地域の目」が自分だけでなく周りの人を守り、周りの

人も自分を守っていることに気付かされた。この大切さを多くの人に伝え、地域の関心を寄せあい、少しでも犯罪を減らしたい。これが私にできる、防犯の第一歩である。